



発行

名古屋大学大学院 国際開発研究科

〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
tel/052-789-4953 fax/052-789-4951

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp>

### 年度後期の所感

#### 国際開発研究科の持続的発展に向けて Part2

副研究科長 藤川 清史

歳をくうと時間が速いですが、2007年に国際開発研究科に赴任しての2年間は、環境変化への対応で、あっという間でした。昨年は「新スタッフ紹介」でニュースレターに登場しているのですが、今回は大胆にも、研究科の将来について寄稿させていただいています。ニュースレター25号で、二村研究科長は「(大学の)本質的な変化を実感できないようであれば、大学人として鈍感に過ぎるとの謗りを免れない」と書かれましたが、わたくし個人的には「本質的な変化」を実感しています。

個人の環境変化もさることながら(研究科長もご指摘のように)国際開発研究科を取り巻く環境も変化しています。一つは「留学生30万人計画」です。<sup>\*1</sup> 現在日本に約12万人いる留学生を2020年までに30万人に拡大する計画です。名大本部は、文科省が選定する30拠点大学になるべく「留学生増員計画」を急いでいます。そんななか、建物の高さの割には目立たなかった国際開発研究科は(名大内部ですが)俄然注目的になり、複数部局からの連携要請がありました。変化への対応にはある程度のスピード感も必要ですが「急いで事はし損じる」の例えもあります。先生方のお知恵を借りながら、可能な範囲で対応してまいりたいと思います。

財源と人員の削減や教員個人評価も環境変化の一つです。<sup>\*2</sup> ただ、大学は公的機関と私企業の両方の性格を持っています。あまりに親方日の丸も困りますが、効率の最大化が組織目標でもありません。改革はいつの時代でも大切なのですが、そこでは(ダブル・スタンダードというのではなく)それらのバランス感覚が必要でしょう。名古屋大学の諸先輩がノーベル賞を受賞されましたが、その原動力は「自由闊達な研究環境」だそうです。「改革」の方向性についても、自由闊達な議論ができればと思います。

\*1. 詳細は、<http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29kossi.pdf>

\*2. 名大が行った自身の業務実績評価は、ここで見られます。  
[http://www.nagoya-u.ac.jp/out/pdf/practice\\_evaresult\\_h19.pdf](http://www.nagoya-u.ac.jp/out/pdf/practice_evaresult_h19.pdf)

#### 「開発」と「発展」のすれ違い

副研究科長 山形 英郎

私は国際法を研究対象としている。国際法上、right to developmentという法概念がある。これを「開発の権利」と訳すか、「発展の権利」と訳すか、議論のあるところである。今では、「発展の権利」で落ち着きつつあるようである。

一方、国際開発研究科(GSID)の「開発」は、どのような意味なのであろうか。GSIDは国際開発専攻(DID)、国際協力専攻(DICOS)そして国際コミュニケーション専攻(DICOM)から成り立っているが、GSIDのDを文字通りに理解すれば、DIDのDとの違いは何であろうか。もしもGSIDのDとDIDのDが同じであるならば、DICOSもDICOMも不要となる。DIDの国際開発とDICOSの国際協力は同じであると主張する人がいる。では、日米安保のような軍事「協力」は、開発と関係があるのだろうか。答えは否であろう。国際開発と国際協力は別概念であると理解する方が自然だ。たとえ、国際開発と国際協力が同じであるとしても、DICOMの存在はどのように説明したらよいのだろうか。

私は、GSIDのDは、「開発」ではなく「発展」であると理解している。人間の発展、社会の発展、国家の発展、国際社会の発展、さらには人と人との関係の発展、国家と国家の関係(国際関係)の発展、もっといえば、人と国家の関係の発展、社会と国家の関係の発展、国家と世界との関係の発展を、射程に収めていると理解している。だから、DICOSもDICOMも、国際「発展」を研究するという点では、GSIDの必須のコンポーネントとなる。GSIDのDが「発展」を意味すると理解することによって初めて、このDがGSIDの統合原理として作用する。そうした理解こそが、GSIDの「発展」に寄与するものと信じている。

※これは個人的見解であり、所属する機関の見解を示すものではない。

## 海外実地研修

## OFW 2008 in Thailand

海外実地研修実施委員会

委員長 大橋 厚子



▲ 地元の特産品を生産・販売するBorsang Umbrellaでの集合写真

国際開発研究科(GSID)では、学生が教員とともに開発途上国に赴き、現地調査の研修を受ける「海外実地研修」(Overseas Fieldwork: OFW)をカリキュラムの一環として実施してきた。17回目となる今年度のOFWは、チュラロンコン大学(Chulalongkorn University)の協力を得て、タイ王国チェンマイ(Chiang Mai)州およびランブン(Lamphun)州で実施された。チュラロンコン大学は1992年にGSIDと学術交流協定を結んでおり、同大学のOFW支援は今回が6度目となる。さらに、今年度のOFWでは、GSIDが文部科学省に申請して採択された「大学院教育改革支援プログラム」のもとに、改良された取り組みが実施された。テレビ会議システムでGSIDとタイを結んで実施されたチェンマイ大学教授の講義、観光学を専門とする琉球大学梅村哲夫准教授の現地調査同行、現地調査における学生アシスタントの導入、調査地の学校における博士課程後期学生の授業、チュラロンコン大学学生との意見交換などがその例である。さらにタイでは初の試みとして、調査地地元のチェンマイ大学から教員および学生通訳の応援を得ることが出来た。

OFWに参加する学生は、関心分野別に4つのワーキング・グループ(経済開発、教育・人材開発、開発の中の少数民族、観光開発)に分かれた。タイでの実地研修以前にGSIDにおいて事前研修を実施したが、その一環として参加学生はProject Cycle Management(PCM)の調査手法を学んだ。タイにおける現地調査参加者はGSID側からは「大学院教育改革支援プログラム」関係者も含めて学生34名、教員5名、チュラロンコン大学からは教員2名、チェンマイ大学から教員2名、学生通訳7名であった。くわえてタイ国財務省の若手2名から通訳の協力を得た。10月1日から14日までチェンマイ市内のホテルに滞在しチェンマイ州とランブン州の調査

地に通った。研修中は各グループに原則としてタイ側教員1名、学生通訳2名、GSID側から教員1名、学生アシスタント1名が加わり、全活動をともにした。今年度は大坪副委員長の発案により、各グループが統一テーマである「開発と次世代 Development and the Next Generation」と、いくつかのキーワード(「都市と村落部のリンケージ」「地方のリソースの活用」など)のもとに数カ所のサイトを組み合わせて調査する手法が取られ、研修最終日にはチェンマイで調査結果の発表会を実施した。研修の詳しい成果については、年度末に刊行される報告書をご覧いただきたい。

今年度の研修は、チュラロンコン大学・チェンマイ大学の教員および学生をはじめ、チェンマイ州・ランブン州の関係各位、そして何よりも調査で訪れたサイトの人々から、多大なご支援とご理解をいただくことによって、実り多い調査とすることができた。ここに感謝の意を表したい。また、チュラロンコン大学との継続的な学術交流の強化、およびチェンマイ大学との新しい関係の構築によって、互恵の関係を深めることができたことを喜ぶたい。

## ● ● ● 現地調査日程 ● ● ●

月 日	活 動 内 容
10/1 (水)	名古屋 バンコク経由 チェンマイ(タイ航空)
10/2 (木) 10/7 (火)	ワーキング・グループ別の調査
10/6 (月)	夜:チュラロンコン大学学生との交流パーティ
10/8 (水)	チュラロンコン大学学生の前で調査の中間発表・交流パーティ
10/9 (木) 10/10 (金)	ワーキング・グループ別の調査
10/11 (土) 10/13 (月)	報告会の準備
10/14 (火)	調査地での結果報告会、GSID主催のお別れ会 夜:チェンマイ バンコク経由 名古屋(タイ航空)
10/15 (水)	早朝に帰国

## 海外実地研修に参加して

### Working Group 1 : Economic Development

Group Leader

Mandar Vijay Kulkarni

The title of our group's fieldwork was "The Empowerment of Handicraft Sector and Its Impact on Local Economy: The Case of Chiang Mai Province, Thailand". The objectives of our research were to determine the contribution of the handicraft sector in Chiang Mai to the local economy, to find out the obstacles the handicraft enterprises faced, and to work out ways to empower these enterprises so that they were better able to cope with these problems. Our research found that micro and small enterprises, most of which are family owned and reliant on seasonal business, are not resilient to internal and external shocks. Our group highlighted eight ways to empower these firms to make them more resilient to unforeseeable occurrences such as poor seasons and economic instability. In addition, we discovered that women are more in number of the total workforce in handicraft enterprises as well as in FDI firms.

We all were excited about going to Chiang Mai and experiencing firsthand what we had read in reports. Once in the field, we found that many of the realities were different from what we had imagined. For example, we had been under the impression that improved technology through the introduction of new machinery could help increase productivity and lead to more profits for these micro and small enterprises; however, it was clear that what they required rather than state-of-the-

art technology was entrepreneurial skills to manage their businesses.

At times, we had to alter our strategy—we learned the need for flexibility. For instance, we realized that because of time constraints, we had no option but to drop one of our research questions. The field work taught us how to conduct research as a group and adapt to different situations. This research gave us an opportunity to implement certain aspects of PCM (Project Cycle Management) activity. We also learned a great deal from the local people and were overwhelmed by the hospitality of those we met in Chiang Mai. The support of interpreters and the local people was indispensable for carrying out this survey. On behalf of our group I would like to express our gratitude to Professor Otsubo, Professor Phaisal and Professor Penghuy, and all the others who helped us.



▲ At the Baan Tawai Handicraft Center, our core site



▲ Interviewing the manager at Baan Benjawan Scented Candle factory Office

### Working Group 2 : Education

グループリーダー 松井 佳代

Working group 2はチェンマイの教育に関心を持つ7名の学生によって構成された。国籍別には日本人5名、インドネシア人1名、カンボジア人1名、また専攻別にはDID 5名、DICOS 1名、DI-COM 1名というメンバーである。私たちはチェンマイの若者を取り巻く課題として、彼らのライフスキル向上に教育が果たす役割に着目し、特に技術職業教育・訓練とタイ教育の特徴のひとつである「ローカル・カリキュラム」に焦点を当てて調査を行った。

2008年5月～9月は、参加者必修の「海外実地研修特論」を通してタイ(チェンマイ)社会について学び、共通科目の「フィールドワーク入門」や「プロジェクト・サイクル・マネジメント(参加型計画編)研修」において実践的なスキルを身につけ、またそれらを反映させながらグループの調査計画を練った。ミーティングはほぼ定期的に開催していたが、議論の行き詰まりにより長時

間化することもしばしばであった。

10月、不安と期待を抱えながらチェンマイへ出発した。調査対象地は学校や企業を中心に10ヵ所。学校関係では校長・教員・生徒、企業では経営者・従業員に対し合計75の半構造化インタビューを実施した。現地に入って調査が始まるとすぐに計画と現地の実情との乖離が見られ、様々な修正や調整を余儀なくされたが、メンバーの個性と底力で対処することができた。まさにグループワークの醍醐味を実感した瞬間であった。インタビューは7名のメンバーを3チームに分け、通訳としてチェンマイ大学のAttachak先生、Bewさん、Keiさんにそれぞれのチームに入って頂く形で実施した。また、北村先生と博士課程の桑垣氏にはインタビュー方法からデータ分析に至るまで丁寧なご指導を頂き、15日間の調査を有意義に終えることができた。

11月末現在、私たちはレポート執筆と最終報告会準備に取り組んでいる。海外実地研修の最終段階である。研修の成果はレポートや報告会に留まらず、私たちの修士論文、さらには卒業後スタートする職業人生において大いに活かされていくこととなるだろう。最後になるが、このような貴重な学びの機会を与えて下さった関係者の皆様、調査に協力して下さいましたチェンマイの皆様深くお礼申し上げたい。



▲インタビュー終了後、生徒との談笑



▲ Working Group 2

## Working Group 3 : Ethnic Minority Group

グループリーダー 安治 香織

私たちはチェンマイの少数民族モン族の観光村、ドイ・プイに焦点を当て、彼らが近代化とそれに伴う開発の影響をどのように受けて来たかについて調査を行った。ドイ・プイの主要産業は観光業であり、彼らは常にその影響の中で生活している。私たちはグループを、経済、教育、伝統文化の3つに分け、それぞれの視点から、ドイ・プイの現状を把握しようと努めた。

調査の初め、私たちは観光業の発展が彼らの伝統文化を消失させるものであるとし、近代化の強い影響下にある次世代の若者達が、どのようにして伝統文化の保持と経済発展とのバランスを取り得るのか、という疑問を有していた。しかし、インタビュー調査を進める中で様々な人々に出会い、それぞれの理解を深めることで、私たちは新たな視野を持つことが出来た。

調査を通して、ドイ・プイ村における伝統文化の保存と観光産業の発展とが、決して対立するものではないということが明らかになった。観光業は彼らの豊かな文化を基盤としており、その発展のためにある一定の伝統文化の保存は必須である。そして、観光業がもたらす収入によってドイ・プイ村はその安定を保っており、観光業と伝統文化は相互に影響しあいながら変化・発展し、独自の観光文化といえるものが形作られてきたと言える。

チェンマイでのOFWを通して、私たちはフィールドにおける調査の手法を学び、その難しさと面白さを実感することが出

来た。そして、グループメンバーと2週間行動を共にし、また準備期間を含めて同じ目的、喜びや悩みを共有出来たことは、私たちにとってかけがえのない経験であった。

初めてのフィールドワークとインタビュー調査で、時に的外れな質問をしてしまう私たちを、辛抱強く支えて下さった大橋先生、チェンマイ大学の中井先生を始めとする先生方、チェンマイ大学の学生たち、そして調査に協力して下さいました。心からお礼申し上げます。



▲ドイ・プイ村で村長の説明を受ける



▲ナイトバザールでの集合写真

## Working Group 4 : Tourism Development

グループリーダー 姫田 哲平

私たちWorking Group 4のテーマはツーリズムでした。一言でツーリズムといっても、経済、環境、社会など複数の視点を考慮して分析しなければならないため、私たちにとっては大敵でした。私たちの中にはツーリズムを専門にしているメンバーがいなかったため、ツーリズムとは一体何なのかということから始まりました。また国籍が日本、タイ、インドネシア、ベネズエラと様々で、専攻も経済、社会文化、ガバナンスと違っていたため、プロポーサルを作るのにかなり難航しました。最初のチェンマイに行くまでに何度も話し合いを重ね、プロポーサルを修正し、最終的に地域コミュニティとツーリズムの関係性について調査することに決まりました。

こうして迎えたOFWで、私たちにとって最も印象深かったのがChiang Dao洞窟でした。この洞窟についての情報はほとんどなかったために、事前調査ではほとんど調べることができていませんでした。そのため私たちはただ洞窟を探検するだけだと

思っていました。しかしこの洞窟はお寺によってマネジメントされており、地元の人々にとっては観光業だけでなく、彼らの文化や信仰にとっても非常に重要な場所でした。また観光収入の多くがお寺に行くので、変だなと思い調べてみると案の定、お寺は地域住民に対して再配分の機能を有していました。ここでは観光とお寺が地域社会と密接に結びついていることを知りました。

この他にも多くの観光地を回りました。Baan Tawai hand-craftセンターやUmbrellaセンターでは多くの職人が伝統的な文化を活用して観光客に伝統工芸品を提供していました。エレファントキャンプでは象という一つの資源を最大限に活用し、大きな経済効果を生みだしていました。またモン族の村やMae Klang滝では観光が文化や自然を守るのに大きく貢献していました。

OFW中は朝早くから眠たい目をこすりながら調査に出発し、夕方にお腹を空かせて帰ってきて、夜遅くまで調査結果について議論する日々でした。特に最後の3日間は発表に向けてメンバー全員が身体的にも精神的にも疲れ切っていました。発表が終わった時の達成感はとても心地いいものでした。違ったバックグラウンドを持つ人間が一つのものを作り上げたこの経験は、私たちにとって大きな財産になったと思います。

最後に私たちをご支援くださったGSIDの先生をはじめとした関係者のご協力に深くお礼を申し上げます。



▲Chiang Dao洞窟を視察



▲Mea Klang滝を背景に集合写真

## 国内実地研修

## 国内実地研修 2008

国内実地研修実施委員会

委員長 東村 岳史

国内実地研修は、現場での実践的な教育研究活動を重視する国際開発研究科にとって重要な取り組みの一つであり、海外実地研修とともに研究科共通課題として位置づけられている。2008年度は、長野県下伊那郡阿智村の協力を得て、11月4日から6日にかけて訪問調査、また11月28日には報告会を行なった。参加者は28名(全員博士前期課程1年生、うち1名は法学研究科、日本人学生11名、留学生17名)、経済・行政・福祉・教育の4グループに分かれ、教員5名が引率にあたった。

阿智村は、前年度研修を実施した清内路村に隣接し、両村は2009年度に合併することが予定されている。実は阿智村を研修場所として選んだのも、合併という事態を両側から検討することが地域再編の掘り下げた理解につながるのではないかという思惑からであった。もちろん分野毎に合併による影響の違いはあるものの、変化の最中にある自治体の様子を学生たちはそれなりに肌で感じる事ができたのではないかと思う。

今回の研修を通して特に印象に残ったことは、自治体側が私たちのような外部の訪問者を受け入れる姿勢である。昨今は阿智村を訪れる団体が多く、私たちの訪問調査中やその前後も、他団体の視察を並行して受け入れておられたようである。受け入れ側にとって大きな負担であることはまちがいない。それでも、外部からの批判を積極的に取り入れ、村づくりに活用していこうというのが阿智村の意向であるともうかがった。それに関連して、報告会の席でも学生たちの発表に対し、いろいろな励ましの言葉や事実関係のご指摘などをいただき、村の開かれた姿勢を学ぶことができた。

今後は、自治体への訪問団体が増加する中、受け入れ側にとってメリットとなる研修のあり方はどのようなものなのか再考しなければならないかもしれない。ともあれ、研修の実施にあたってご協力いただいた阿智村の岡庭村長をはじめ、村役場、特に協働活動推進課の方々、その他お世話になった関係者の方々に、厚く御礼を申し上げたい。



▲ 阿智村役場前の集合写真

## ● ● ● DFW訪問スケジュール ● ● ●

## 11月4日(火)

	午前 10:00~12:00	午後13:00~17:00	
WG1		13:00-15:00 阿智村 経済活性化課	15:00-17:00 阿智村 ふるさと整備課
WG2	10:30-12:00 阿智村長と オリエンテーション	13:00-17:00 阿智村定住促進・開発計画課	
WG3		13:00-15:00 阿智村民生課	15:00-17:00 阿智村社協事務局
WG4		13:15-17:00 阿智村教育委員会	

## 11月5日(水)

	午前 9:00~12:00		午後13:30~17:00	
WG1	9:00-10:30 JA阿智支所	10:45-12:00 阿智の里	13:30-15:00 西栗矢 栗矢廻り舞台	15:15-17:00 肥後観光農園
WG2	9:00-12:00 伍和自治会		13:30-17:00 浪合自治会	
WG3	9:00-10:30 特養阿智荘	10:45-12:00 幸寿苑	13:30-15:00 寿楽苑	15:15-17:00 阿智温泉療護園
WG4	9:00-12:00 浪合小中学校		13:30-15:30 通年合宿 センター	15:30-17:00 こども村 サマーキャンプ

## 11月6日(木)

	午前 9:00~12:00		午後13:00~15:00	
WG1	9:00-10:30 治部坂 観光センター	11:00-12:00 屋神エリア サポートセンター	13:00-15:00 屋神エリア サポートセンター	15:00-15:30 閉会式
WG2	9:00-11:00 ゆずり葉の会	11:00-12:00 ボランティア 社教	13:00-15:00 とくさ会 ボランティア 社教	
WG3	9:00-10:30 デイ・えんばな			
WG4	9:00-12:00 阿智中学校		13:00-15:00 阿智村総務課	

## ● ● ● 結果報告会 ● ● ●

項目	詳細
日時	2008年11月28日(金) 13:00-15:00
場所	阿智村コミュニティ・ホール

## 新スタッフ紹介

Assistant Professor Mark Rebuck



Hello, my name is Mark Rebuck and I have recently taken over from Melisanda Berkowitz as the person in charge of assisting students with their thesis writing. My job is to correct mistakes and also gives pointers to students on improving their academic writing. I have only been in this position for a short time, but I have already become more careful in how I write myself, which is not to say that I don't not make mistakes (spot the double negative?).

Before coming to GSID, I worked for over four years in Nagoya City University teaching writing and conversation. I have been in Japan for around thirteen years, three of which were spent working as a CIR (Coordinator for International Relations) in Kagawa Prefecture. My time in Japan has been interrupted by sojourns in Britain, where I am originally from, to do two Master degrees—one in Japanese and another in TEFL (Teaching English as a Foreign Language).

In retrospect, I could have been more focused in my life: a total of two years were spent working in a hotel in Shizuoka and for a Japanese travel agent in Lon-

don, and another one practicing martial arts in Korea. I think I will encourage my son (who has just turned two) to decide what he wants to do early in life (I've already put the prospectus for Nagoya University Medical School in his toy box).

My present research interest is the use of authentic listening resources in the language classroom. In particular, I have sought through action research to explore the value of unscripted audio clips, for example from radio phone-in programmes, for lower-level learners. Perhaps my work at GSID, particularly reading students' papers on various topics, will stimulate me to venture into new, not necessarily linguistic related, areas of research.

I look forward to meeting you in person and hope that I can contribute a little to further raising the high standard of the academic work produced by GSID students.

## TOPICS

### アブダビ政府との覚書を締結

国際協力専攻 教授 中西 久枝

2008年11月2日、名古屋大学大学院国際開発研究科は、アラブ首長国連邦アブダビ首長国政府行政管理省とのあいだに、国際学術協力関係を深めていくことについての覚書を締結しました。覚書ではアブダビ政府の幹部人材養成のため本学において中堅クラス職員に対する行政官研修を実施して、日本の開発経験や地方分権化のモデルを教授することで、アブダビ政府の能力向上を図ることが明記されています。

このようなアブダビ政府に対する国際協力は、アブダビ皇太子が昨年12月に訪日し、日本型のガバナンスに関心を示されたことが契機となりました。その後、NHK教育テレビがアブダビと日本の交流についてのテレビ番組を制作し、その番組で収録された「日本・アブダビ国際交流シンポジウム」にパネリストの

一人として参加した筆者は「日本がアブダビに対してできる協力として、中央・地方政府の人材育成事業がその一つである」と提言しました。

その後、アブダビ行政管理省から、アブダビの日本大使館にアブダビ行政官の研修事業の要請があり、2008年6月にはそのアブダビ行政管理省のミッションが本研究科を訪問し、研修事業を実施することを前提に、現地のニーズ調査のためアブダビを訪問することが合意されました。そして、11月1日(土)から4日(火)までの4日間、国際開発研究科木村宏恒教授、環境学研究科竹内恒夫教授、名古屋大学小島泰典国際部長及び筆者が、アブダビを訪問しました。アブダビでは行政管理省の他、環境省およびザイッド大学を訪問しました。環境省ではマジッド次官に本年10月から開始する名古屋大学国際環境人材育成プログラムを説明するとともに環境政策に関して意見交換が行われ、覚書の締結に至りました。また在UAEの波多野日本大使を訪問し、今回の覚書締結について報告しました。

名古屋大学国際開発研究科でのアブダビ行政官研修は、2009年2月中旬より2週間の日程でパイロット事業として開始し、年間2回を目安に2年間継続する予定となっています。今後、国際協力事業がますます進展していくことが期待されます。



◀アブダビ行政管理省オメール部長と本研究科中西久枝教授、覚書を締結

## 受賞紹介

愛知淑徳大学 非常勤講師 (GSID修了生) 水野 晶子



この度、第五回日本ロシア文学会賞を受賞する榮譽に接し、去る10月11日に行われました同学会の総会にて表彰していただきました。本年度は学会場が偶然にも名古屋を本拠地とする中京大学でありましたので、名古屋の地で表彰していただき、一段と思い出深いものとなりました。

今回、受賞対象となりましたのは『ロシア語・ロシア文学研究(37号)』に掲載されました「ロシア語における身体の所有者マーカ―としての「y+生格」―与格との比較―」と題する論文です。この論文は、ロシア語の「AガPノ身体ニVスル」構文において対象としての身体の所有者(Pノ)を表す方法として「y+生格」が使われる場合と「与格」が使われる場合を通時的視点も取り入れながら比較対照し論じたものです。これは、同誌36号に掲載されました「身体領域と身体の所有者の表示形式―19世紀・20世紀文学テキストの計量的調査の結果を踏まえて―」と呼応する形となっている論文であり、両論文はいずれも本研究科に2007年度に提出しました博士論文の一部を成すものでもあります。

すから、私にとってこの度の受賞は、GSIDの思い出と共にあります。まだまだ磨きをかけるべき点があることは否めないものの、GSIDに身を置く過程での研究成果を評価していただいたことは非常に喜ばしいことです。

GSIDでお世話になりました諸先生方、そして友人たちにこの場を借りて改めて感謝の意を表したいと思います。

本研究科修了後の現在は、愛知県下の大学でロシア語の非常勤講師を務めております。授業を通じてロシアの様々な姿に触れ、隣国が秘める魅力を感じてもらいたいと魅力ある授業づくりに試行錯誤を重ねる日々ですが、研究においても更に研鑽を積んで参りたいと受賞を期に思い新たに致しております。

なお、日本ロシア文学会賞は前年度に発表された研究論文を対象とするもので、例年、前年度の学会誌に掲載された論文が対象の中心となっており、本年は2名の受賞でした。

## 院生活動紹介

### JICAインターンシップ in Zambiaで達成できたこと 国際協力専攻 前期課程 軽部 敬史

私は、JICAザンビア事務所(ガバナンスチーム)において、2008年8月15日～10月2日までインターンシップを経験することができました。今回はその内容を報告するとともに、同インターンで何をすることができたのかについて述べたい。

JICAインターンは大学院生を対象に毎年募集を行っている。私は、将来の選択肢の一つとして考えているJICAの業務一般について学び、専攻しているガバナンス分野を援助実務から理解し、訪れたことのないアフリカを肌で感じたいと考え同インターンに応募した。

ザンビア事務所ガバナンスチームは日本人三名とナショナルスタッフ数名で構成され、「地方分権化のための能力強化プロジェクト」を管理している。このプロジェクトは各地方自治体の人事管理制度の構築や財務監視能力の向上を通して、地方自治体のマネジメントサイクル(計画・予算策定、実施・調整、モニタリング評価、政策へのフィードバック)における人的・組織的能力の強化を図るものである。プロジェクトの一期間ではあるが、私は、ガバナンスチーム会議やザンビア地方自治住宅省(カウンターパート)とのミーティング、地方分権化セクターのドナー会合(JICA、WB、UNDP、GTZなどがメンバー)などに参加した。

並行して、地方自治住宅省より交付される「選挙区開発基金」(全国に150ある各選挙区の要望に応じて400millionクワチャ＝1200万円が交付される:その用途は貧困削減のための小規模コミュニティプロジェクト)について情報整理を行い、同省ザンビア人担当官からもヒアリングを重ね、選挙区開発基金解説書を作成した。その他にも、ザンビア事務所での所内会議やセミナー、専門家研修(HIV/エイズ)への同行、ザンビア北部における協力



▲ JICAザンビア事務所にて



▲ 首都ルサカ近郊のある地区で、エイズ検査・予防を促すロールプレイングが行われていた

隊員の活動見学など、幅広く開発援助の現地世界に触れることができた実感している。また、日本人関係者やザンビア人ナショナルスタッフも暖かく接してくれ、現地社会も十分に楽しむことができたように思える。

ザンビアでの業務や活動を通してみえてきたことは、関係者のプロジェクトへの真摯な取り組み、現地調査の困難さと面白さ、そして多くの日本人が積極的に現地生活を楽しむ姿勢であった。とくに私の数名の上司は日々柔順とプロジェクトを進めており、その傍らで丁寧に私を指導してくれた。彼女らのプロフェッショナルとしての情熱と優しさに接することができたことが一番の収穫である。

業務を通して上記の志望動機はいくぶん達成されたと思えるが、ガバナンス分野の支援を開発実務において実践していく難しさを垣間見、現地で苦悶する時間も多かった。ただ、今回のJICAインターンによって国際開発の基礎力をGSIDでより深く学ぶ必要があると認識すると同時に、将来に向けてあらたな挑戦をしようとする機会を得た。次はプロとしてザンビアに赴きたい。

## 修了生の紹介

特定非営利活動法人ソムニード 原 康子

皆さま、初めまして、特定非営利活動法人ソムニード(事務局本部:岐阜県高山市)に勤務する原康子と前川香子と申します。原は、1996年に国際協力専攻を、前川は、2003年に国際開発専攻の修士課程を修了しました。GSID在籍期間は異なりますが、私(原)が、同じGSIDの修了生である前川がソムニードに就職を希望していると聞いたときは、嬉しい驚きでした。

原は2001年から、そして前川は2005年から、南インド、アーンドラ・プラデッシュ州ビジャパトナム市のソムニード・インド事務所に配属され、農村部と都市部でのコミュニティ開発に従事しています。

原も前川も、ソムニードの海外事業担当として、コミュニティの現実(リアリティ)に迫るフィールドワークの手法と住民をパートナーとしてコミュニティ開発に携わるものに必須の技術であるファシリテーションの指導を、徹底的にソムニードで受けてきました。

農村部の事業では、水源地近くの山岳少数民族の村々を、都市スラムでマイクロ・クレジットに関する事業では、スラムの女性グループに、毎日のように足を運びます。

GSID在学中、前川の指導教官の岡田亜弥先生に問われた「貧しさをどう測るのか?」、また原の指導教官の重松伸司先生がおっ

しゃっていた「農村の問題はすべて“水”に凝縮されている」とは?、そして、「そもそも開発とは一体誰のものか?」などなど、在学中に知識として得たことが、今、ようやく実態を持ったものとして理解できるようになってきたところです。(原、前川の担当する事業報告は、ソムニードのブログ<http://somneed.seesaa.net/>にPDF形式でアップされていますので、ご覧ください。)

GSIDでは、開発における日本の役割も取り上げられていますが、ソムニードでは、日本国内(飛騨地域)でもコミュニティ開発を実施しており、海外事業と国内事業が連携しています。事務局本部が、GSIDと同じ中部地方にあることから、今後も、GSIDとの人・情報の連携を期待しています。

ソムニードでは、高山やインドで、コミュニティ開発に関する研修の実施、そしてインターン募集もしていますので、ご関心のある方は是非、ソムニード事務局([www.somneed.org](http://www.somneed.org))まで、お問い合わせください。



▲インド&ネパールのスタッフ向け研修  
(青の服が原氏、オレンジが前川氏)

## スタッフの人事異動

### 教員

平成20年6月1日 採用  
国際開発専攻 助教 Ngov Penghuy

平成20年10月1日 採用  
国際協力専攻 助教 Mark Rebeck

### 事務

平成20年10月1日 転出  
教務G掛長 隅坂 弘幸 (研究協力部研究支援課へ)

平成20年10月1日 転入  
教務G掛長 森 征一郎 (文系教務課教務G(学生支援)から)

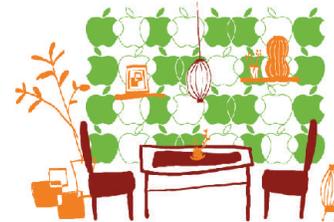
## 客員研究員の紹介

### 国内客員研究員

- 森田 敦郎(大阪大学人間科学研究科 講師)  
研究課題:タイのクラフト労働市場と産業人材育成  
期 間:平成20年10月1日～平成21年3月31日
- 岡田 尚美(財)国際開発高等教育機構事業部 部長)  
研究課題:開発プロジェクトの管理運営手法研究について  
期 間:平成20年7月1日～平成20年9月31日
- 濱田 真由美(財)国際開発高等教育機構事業部 次長)  
研究課題:開発プロジェクトの管理運営手法研究について  
期 間:平成20年7月1日～平成20年9月31日

### 外国人客員研究員

- 孫 慶忠(中国農業大学人文与発展学院社会学系 副教授)  
研究課題:日本農村社会研究  
期 間:平成21年1月30日～4月30日



## 研究科出版物の紹介

- 『国際開発研究フォーラム37』2008年9月16日発行  
『国際開発研究フォーラム38』2009年3月発行予定

掲載論文は下記URLアドレスより全文閲覧可能です。  
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/>